髭のある女

関浦有紀、二十八歳、彼氏なし、独身。

別に好きで独り身でいるわけではない。いつの間にか二十八年が過ぎていただけだ。しかし、さすがに彼氏いない歴イコール歳ではない。私の唯一の淡い淡い思い出は遡ること二十二年前、同じ保育園の柳川君とのチューである。ほっぺただったとは言え、なかなかやるじゃないか、五歳の私。しかし、それからというものチューはおろか、異性とお付き合いすることさえなかった。

勿論、結婚だっていずれはしたいし、家庭を持つことにあこがれは抱いている。

しかし、憧れは憧れ。現実はそう甘くない。それに自分でいうのもなんだが、とても面食いだと思う。同じセリフを言われても、顔次第で全く受け止め方が違うのだ。例えば、かっこいい人に「有紀さん、愛してるよー」なんて言われちゃ、その日には――――

「ちょっと、いつまでその肉切ってるの？」

傍にいた同僚の梶田さんに白い目で見られた。

「ほんとちゃんと仕事してよね」

彼女は私の事が相当嫌いらしい。私というよりは、仕事の処理スピードの遅い人間が嫌いなのだろう。

「す、すいませんでした」

「悪いって思ってるなら初めからミスしないでくれるかな」

大きなため息を一つついて、彼女はその日の仕事を切り上げていった。

実は私はスーパーの裏で、肉のカットの仕事をしている。毎日毎日、鶏やら豚やらを切って切って切りまくる。いっそ私の下っ腹もすっきり切り落としたいものだ。しかし、そんな単純作業でミスをするのだ。たいていはぼやぼやと考え事をしてミスをする、そして梶田さんに叱られる。

何も私は好きで肉切りをしているのではない。本当はパティシエになりたかった。小さい頃から、手先は器用だったし、デザインをするのも好きだった。ちゃんと製菓専門学校を出て、二級菓子製造技能士の資格まで取ったのだ。しかし、やはり現実はそう甘くなかった。どこも私を必要としてくれなかったのだ。「こんな小さい店で、そんな無茶なケーキを作るパティシエはうちにはいらない」最後に面接に行った店からはそう言われた。確かに、私の思い描いているパティシエの姿は理想が高いのかも知れない。でもいいじゃないか、この年までいいことなんて数えることしかなかった私に、一つくらい大きな夢を描いたって。頬を涙がつたった。

「ハァ、めそめそ泣くくらいなら、もうここ辞めれば？　そうしてよ。あんたがいると、こっちまで不運が寄って来そうだわ」

また一つ大きなため息をして梶田さんは部屋の明かりをすべて消して帰って行った。

私は、涙でぬれた頬を乱暴にぬぐった。なんだか変な感じもしたが、今は鏡を見るほど心に余裕がなかった。

後ろのポケットに入れていたスマホであたりを照らしながら、照明のスイッチのところまでたどり着いた。作業着をロッカーにしまって、私服に着替えると、カバンからペンと書類を取り出した。勿論、辞職届を出すため。なあに、今回で四度目だから特にためらいなんてない。ここは時給もそこそこ良かったし、梶田さんを除けば、あとは皆親切に接してくれたと思う。しかし、やっぱり私は疫病神なのだろう。

そんなことを思いながらサクサクと書き終えると、部長の机の上に置いて帰った。帰る間際、梶田さんのロッカーを思いっきり蹴ってやったら、少しは気持ちが軽くなった。

もう十二月。日付が変わろうかという時刻でもあったせいか、外は驚くほど冷えていて、私の心の内といい勝負だった。

私はいつも家の近くのコンビニか、帰る時間が早ければ十時以降に安売りしているスーパーで、ビールと枝豆とお惣菜、時々美容のためにナッツを買う。今日はもう閉まっているからコンビニで買っ

て帰ることにした。
　古びたアパートの二階が我家だ。ペンキがほとんど剥げてさび付いた階段を上って家に入ると、どっと疲れが出てきた。とりあえず冷蔵庫に買った物を入れてベッドに横たわった。
「はー、明日からどうしよう」
　一応こういうこともあろうかと、少しは貯金をしてあるから、一か月くらいは何とかなりそうだ。そう思っていると、誰からか電話がかかってきた。
「あぃ」
「あぃって……まあ私の名前は愛だけどさ。どう、元気してる？」
　電話は四つ上の姉からだった。なぜか彼女は私が落ち込んだ時を見計らっているかのように電話をかけてきてくれるのだ。ちなみに、二児の母である。
「仕事は順調にいってるの？」
「……辞めた」
「えっ。いつよ」
「今日。今さっき」
「なんでまたそんな急に」
「梶田さんにいろいろ言われたのが一番だけど……やっぱり、私周りの人を不幸にするみたいで。あはは、情けないね、こんな妹っ……」
　最後は詰まってうまく言えなかった。自分で言うと本当に心の傷が深まってしまった。
「そんなことないって。有紀はお姉ちゃんの自慢の妹だよ。ちゃんと分かってるからさ。辛かったらいつでも家においでよ。あんた一人くらいなんとかなるしさ」
　電話越しに姪と義理兄の声が聞こえてきた。
「うん。ありがとう。でも大丈夫、私また頑張れそうだよ。電話してくれてありがとね」
　それじゃあと言って電話を切った。
　そのまま寝ようかと思ったが、ものすごい音がお腹から鳴ったので、買ってきた枝豆をちびちび食べながら職業雑誌を眺めた。
　次の朝は電話の着信音で目が覚めた。
「あぃ」
「あ、起こしてしまいましたか。部長の杉田ですが」
「うわわわ。すみません」
　電話越しに笑っていたのだろうか、いや失礼と言って、部長は話し始めた。
「いや、びっくりしたよ。今朝いきなり机の上に置いてあったんだからさ」
「ああ。辞職願ですか。突然で部長には本当に申し訳ないことをしたと思います。今までとても親切にして下さったのに、お礼の一つもしていなくて」
「何を。私は君が一生懸命に頑張ろうとしているのがとても伝わっていましたよ。その、何かあったのか？　もし何かあったのなら、教えてほしい。僕だって責任があるんだ」
　本当のことを話そうか迷ったが、どうせ辞めたのだから言ってもいいだろうと思ったので、梶田さんとのあれやこれやをほとんど愚痴状態で部長に言った。
「そんなことがあったのですか。部長として情けない、まったく」
「いえ、そんな風に思わないでください。結局、私ってドジだったし、たぶん梶田さんはきっぱりと言う方でしたが、そのほかの方も内心はきっとそう思っていたと思うんです」
「もう、戻ってくる気はありませんか」
「ええ、申し訳ないですが」
「そうですか。いや、残念だ」
　私は恵まれていたと思った。誰も私を必要としていないと思っていたこの人生に、部長という人が一輪の花を添えてくれたような気がしたからだ。

「関浦さん」
「なんでしょうか」
「気が進まないと思うのですが、一度職場に来てくれますか？　今まで退職された方たちに何かしら送っていたものですから。いつでもいいですから、絶対に来てください。これは部長命令ですよ」
　最後に少し笑って部長は電話を切った。
　今は、九時。うちの職場は交代制だから、同じ時間帯の人たちは十二時ごろに来るだろう。なら、それまでに行ってしまえ。
　私は寝癖ではねた髪を頭のてっぺんでお団子にした。ここまでは何にも変わらない普通の私。しかし、悲劇は洗面所の鏡の前に立った時に起こった。盛大な悲鳴とともに前のめりになって鏡に映る自分の顔を凝視した。なんと、なんとなんと！　私の口回り、顎、頬に髭が生えているのだ。そうか、昨日涙をぬぐったときに頬に違和感があったのは、あの時すでに髭が生えそうだったのだ。まだ一，二ミリくらいだったが、産毛じゃない立派な男性の髭であった。
「うそぉ！」
「な、んで。どうして！　ハア！？」
　ショックのあまり思わず座り込んでしまった。しかし、部長のところに行くのは諦めきれない。仕方なく、奥にしまい込んでいたマスクを出して適当に服を着替えて家を出た。
　錆びた階段を下りたところで、男性と目が合った。うちの下の住人で、おそらく歳はあまり変わらなく、まだ青年さの残るような人。と言っても、ほとんど顔を合わせたことはなく、前は引っ越しの挨拶の時に会った以来だろう。
「どうも」
　一応軽く挨拶をしてみた。一瞬こちらを見た後、ぺこりと頭を下げてきた。
　なかなかかっこいいと思える人と挨拶ができたので少しうれしくなった。
　ぶらぶらと坂道を下る。元職場に行く前にケーキ屋さんに寄って、焼き菓子の詰め合わせでも買って部長に上げようか。そんなことを考えていると、後ろから呼ばれた。さっきの人だった。
「今日は早いですね、これから仕事ですか？」
「あ、あぁ。そ、そうですね」
「ふーん。いつももう少し遅くないですか？」
　何故か自然な流れで一緒に歩くことになった。
「まあ、そうですね。今日は用があるので。あ、でも、その前にどこかケーキ屋さんによろうかと。あ、そうだ。おすすめのお店とかありませんか？」
　すると、なぜだか彼はにやりと笑って
「俺、とっておきの店知ってるんで行きましょうか」
　と言って私の手を引いて走り出した。
　ああ、何年ぶりだろうかこの感覚。この私が、かっこいい人に手を引かれて走っているのだ。しかし忘れるな。私は今朝髭が生えた女なのだ。少しでも油断すれば、世間に恥ずかしい姿をさらすことになるのだから。そして、その幸せな感覚も長くは続かなかった。何せ、運動という運動は高校生の時以来していないのだから、数分走っただけで息切れしてしまった。
「ちょ、ちょっと。もう私走れないし歩けないんですけど」
肩で息をしながら私はぺたりと地面に座った。
「ハハ、少しとばしすぎましたかね？」
「だいぶですよ、だいぶ。で、そのお店ってあとどれくらいなんですか？」
「ん？　この先曲がったところ。ほら、行きますよ」
「わわわ、ちょっと待って」
　彼の後を追って先の道を曲がったところで、いい匂いがしてきた。
「わぁ。ここが言っていたお店か」
　住宅街の一角にある、そんなに大きくはないが、こじゃれた店だった。
「ええ、じゃあ入りましょうか」

彼の後に続いて店の中に入ると、もうすでに客が何人かいた。すると、奥にいた一人の男性がこちらに近づいてきた。
「店長、遅かったですね。あ、見つかりました？　探し物は」
……店長？
「ああ、うん。見つかった。ありがとう」
「おや、そちらの女性は？」
男性は彼の背後で硬直していた私に気づいた。
「ちょっと待って。ねえ、あなた、ここのパティシエだったの！？」
びっくりしすぎて危うくマスクを外して叫びそうになった。
「あれ、言ってなかったかな」
そう言うと彼はすっと背筋を伸ばして少し微笑んだ。
「ようこそSYOUTAROへ。僕がここのオーナーの神崎翔太郎です。どうぞご贔屓に」
呆気にとられた私の心の奥底で、錆びついて開くことが無いはずの南京錠が、空いたような気がした。